

幼少期における都心および郊外型SCの思い出と現在の訪問頻度との関係

福岡大学工学部社会デザイン工学科 辰巳 浩, 堤 香代子, 吉城 秀治, 梶木 薫

1. はじめに

モータリゼーションの進展に伴い大規模ショッピングセンターの郊外立地が進んでいる。その結果、多くの都市において都心商業地との競合が生じているなど、都心商業地に人々を惹きつけることが都市のコンパクト化等の観点からも重要な課題となっている。そこで、これまでも中心市街地の活性化に向けた研究は数多くなされているが、中でも近年では「子供」の視点を取り入れた研究がみられ、幼少期における都心での思い出が大人となった現在の都心への指向意識を高める上で重要であることが示されている。一方、このような思い出に出る目した研究はまだ研究途上であり、特に、中心市街地衰退の主な原因となった郊外型SC(Shopping Center)における思い出については明らかにされていない。それぞれの思い出の比較ならびに現在の訪問状況との関係を明らかにすることで、将来にわたって人々を都心に惹きつけ続ける上での重要な経験、体験をより明確にすることが可能になるものと考えられる。

そこで本研究では、都心と郊外型SCでの思い出について把握、比較し、現在の訪問状況との関係を明らかにする。

3. 分析結果

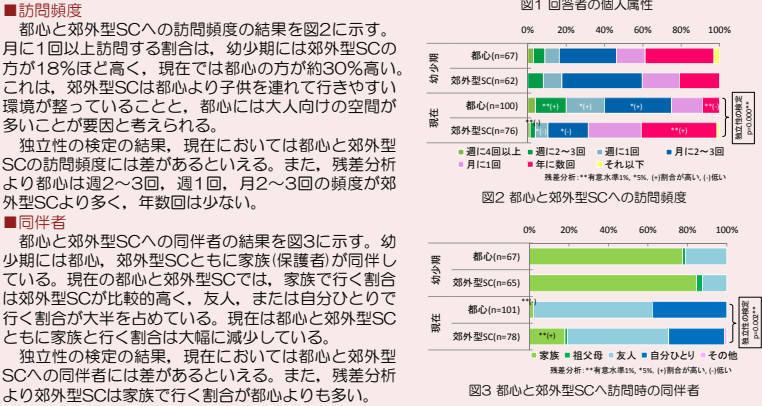
3-1. 個人属性

回答者の個人属性を図1に示す。回答者の平均年齢21.8歳、性別は男性が85%、女性が15%であり、男性の割合が高い。幼少期の居住地は福岡市33%を含む福岡県内で75%であったが、現在では福岡市64%を含む96%が福岡県内に居住している。

自動車の利用状況は家族共同で使える車がある人が45%と最も多く、自分がいつでも自由に使える車がある人は24%であることから、使える車がある人は約7割いる。

3-2. 都心と郊外型SCへの訪問状況

幼少期と現在において、都心と郊外型SCへの訪問状況の結果を示す。さらに、それぞれの時期において都心と郊外型SCの関係を独立性(χ^2)の検定、残差分析より統計的に示す。



2. 調査概要

都心と郊外型SCでの思い出を収集するために、郊外型SCの店舗数が著しく増加した時期に幼少期(小学校卒業まで)を過ごした学生を対象に、アンケート調査を実施した。アンケート調査の概要を表1に示す。

調査対象者は福岡大学工学部社会デザイン工学科4年生で、実施時期は2015年9月末に直接配布・回収した。回収部数は104部で、回収率は93.7%である。

■交通手段

都心と郊外型SCへの交通手段の結果を図4に示す。都心では地下鉄の割合が増加し、自家用車の割合が減少している。都心では幼少期、現在ともに公共交通機関の利用が半数を超えているのに対し、郊外型SCでは公共交通機関を利用しない割合が8割以上を占め、自家用車利用が6割を超えている。

独立性の検定の結果、幼少期も現在においては都心と郊外型SCへの交通手段には差があるといえる。また、残差分析より幼少期は都心へは地下鉄利用が多く、自家用車利用は少なく、郊外型SCへは自家用車利用が多い。現在は都心へは電車や地下鉄利用が多く、自家用車利用は少ないのに対し、郊外型SCへは自家用車利用が多い。

■目的地までの所要時間

都心と郊外型SCの自宅からの所要時間の結果を図5に示す。都心と郊外型SCで大きな差はないが、比較的都心に多くの時間をかけて行く傾向にある。

■訪問目的

都心と郊外型SCへの訪問目的は「買物」「娯楽」「食事」の3つが主な目的であった。そこでより詳しい分析をするために、この3つの目的について、都心と郊外型SC、幼少期と現在で独立性の検定を行った。その結果を図6に示す。

都心と郊外型SCの独立性の検定結果より、買物(幼少期)、娯楽(現在)、食事(現在)で有意差がみられた。郊外型SCには主に買物目的で、都心には娯楽や食事目的で来訪していることが示された。これは、都心、郊外型SCともに最も多い訪問目的は買物であるが、都心では買物以外の目的を行える施設が比較的充実していることが要因と考えられる。

幼少期と現在の独立性の検定結果より、有意差がみられたのは食事(都心)のみで、幼少期に比べ現在都心で食事をする人が増えたことが示された。

3-3. 都心と郊外型SCの印象

幼少期と現在で、都心と郊外型SCのイメージを17個の形容詞ごとに5段階で評価したプロフィール曲線を図7に示す。また、形容詞ごとの都心と郊外型SCの一元配置分散分析の結果も併せて示す。値が5に近づくほど高い評価を示しており、都心あるいは郊外型SCにおいて幼少期と現在でイメージに大きな変化はみられない。

検定結果より幼少期における都心と郊外型SC、現在における都心と郊外型SCで評価に差がある形容詞対は殆ど同じであるが、現在において興味深さ、楽しさなど都心の評価が高くなっている。

全体的に都心と郊外型SCを比較すると、人の多さ、賑やかさ、変化に富んでいるなど場所の状況を表す形容詞対で都心の評価が高い。安全面やきれいさ親しみやすさでは郊外型SCの評価が高く、郊外型SCの方が気軽に行くことのできるイメージが強い。

また、都心の幼少期と現在、郊外型SCの幼少期と現在について形容詞対ごとに検定を行ったところ、都心の幼少期と現在の評価に差がみられる形容詞対は賑やか、興味深い、変化に富んだ、あこがれ、楽しい、行きたいで、現在より幼少期の評価が高く、郊外型SCでは全体として幼少期の評価が高い。

3-4. 幼少期における都心と郊外型SCの思い出

■共起ネットワーク

都心と郊外型SCでの思い出に関する自由記述回答に対して、KH Coderによる解析を行った。KH Coderにより、出現回数の多い単語を抽出し、その抽出語同士の繋がりを表す共起ネットワークを作成した。作成した共起ネットワーク図を図8に示す。なお、共起ネットワークでは出現回数が多いほど大きなバブルであり、線の太さは抽出語同士の結びつきの強さを示す。また、色分けは比較的強くお互いに結びついている部分を抽出してグループ分けを行うサブグラフ検出によるものである。

都心におけるポジティブな思い出としては、おもちゃを買ってもらった思い出(買い物)、おいしい食べ物を食べた思い出(食事)、映画を見に行った思い出(映画)、公園や遊園地で遊んだ思い出(遊ぶ)などがみられる。ネガティブな思い出としては、人が多かった思い出(人の多さ)、親の買い物に付き合った思い出(親への不満)などがみられる。一方、郊外型SCにおける思い出では、買物や食事や人の多い思い出がみられるのは都心と同様であるが、駐車場の混雑や渋滞についてのネガティブな思い出(交通への不満)がみられるのが郊外型SCでの思い出の特徴となっている。また、他の単語との関連はないが単体での出現率が高かったものに迷子が挙げられる。

■思い出と訪問頻度との関係

共起ネットワークによって示されたこれらの思い出と現在の訪問頻度との関係を分析した。ポジティブな思い出、ネガティブな思い出のそれぞれで、訪問頻度との相関を示すCramerのVの値を独立性の検定より求めた結果を図9に示す。

CramerのVはその思い出が強く残っているほど現在の訪問頻度が高くなる(あるいは低くなる)ことを示すもので、全体的にネガティブな思い出の方がCramerのVが高くなっている。特に、郊外型SCにおいては人の多さをはじめ、多くのネガティブな思い出と訪問頻度との関係が示されている。一方、都心での思い出では、ポジティブな思い出との関連としては、映画や食事の思い出が高くなっており、ネガティブな思い出との関連としては親への不満の思い出が高くなっている。すなわち、人々を都心に惹きつけ続ける上では映画等の娯楽や食事の経験、体験によって都心は楽しい場所であった思い出に残るような回遊を促すとともに、ネガティブな思い出(連れ回されることによる親への不満)が残らないような回遊環境が重要であると考えられる。

4. まとめ

本研究では、20代前半の大学生が幼少期に体験した都心と郊外型SCでの思い出を把握、比較した。都心と郊外型SCへの訪問状況の比較としては、幼少期には家族(保護者)に連れられ郊外型SCに行くことが多かったが、保護者の同伴を必要としない現在では都心への訪問が増加している。これは、SCは子連れの親にとって訪問しやすい環境であること、都心がもともと子供を楽しませることを想定した構造となっていないことがその原因と考えられる。

また、思い出に関する分析では、都心と郊外型SCともにポジティブな思い出からネガティブな思い出まで交っていた。中でも、都心では人込みに関して、郊外型SCでは交通への不満が思い出の特徴となっている。そして、映画等の娯楽や食事の経験、体験によって都心は楽しい場所であった思い出に残るような回遊を促すとともに、ネガティブな思い出が残らないような回遊環境が重要であることが示された。